まえだ

前田遺跡

上戸祭小学校東地区

平成17年3月

宇都宮市教育委員会

序

宇都宮市の北西部、上戸祭付近は、釜川によって開けた低地を中心に田園風景が広がっており、近年までレンゲ畑で遊ぶ子供たちの姿がよく見られましたが、宅地化が進み、また宇都宮北道路の工事によって、その姿を大きく変えつつあります。宅地化に伴った周辺人口の増加により、上戸祭地内に新たに小学校の建設が必要になりました。この前田遺跡は、昭和62～63年にかけて宇都宮市教育委員会により記録保存のための発掘調査を実施し、古墳～奈良時代の大規模な集落跡が確認されました。

今回刊行となった前田遺跡も、この遺跡の一部で南東部に位置します。石塚好一氏とトヨタウッドユーホーム株式会社の宅地造成に先立ち、埋蔵文化財の取り扱いについて、事業者と協議をいたしました。その結果、遺構保存が行えない道路部分に関して記録保存を目的とした発掘調査を実施しました。調査によって掘立柱式建物跡や住居跡等の遺構や遺物を確認することができました。これは当時の前田の集落展開を知るうえで非常に貴重な資料を得ることができたものと考えております。

本報告書は、発掘調査で得られた成果をまとめたものであり、多くの方々が多方面におかれまして、広く活用していただけますことを期待するものであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財の取り扱い協議から発掘調査、そして報告書作成・刊行に至るまで多大なるご協力とご理解をいただきました関係各位、関係機関並びに終始ご協力いただきました地元関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成17年３月

宇都宮市教育委員会

教育長　伊藤文雄

図版目次

図版1
調査区全景（東から）
調査区全景（南西から）
図版2
調査区遠景（東から）
調査区西壁標準土層（東から）
調査区南壁標準土層（北から）
ＳＩ－１土層断面（西から）
ＳＩ－１(南から)
ＳＩ－１掘り方（南から）
ＳＩ－１カマド遺物出土状況（南西から）
ＳＩ－１カマド（南西から）
図版3
ＳＩ－２(南から)
ＳＩ－２掘り方（南から）
ＳＩ－３(南から)
ＳＩ－３掘り方（南から）
ＳＩ－３「田人十一万」墨書土師器坏出土状況（東から）
ＳＩ－３カマド（南から）
ＳＩ－３凝灰岩製袖芯出土状況（南から）
ＳＩ－４土層断面（南から）
図版4
ＳＩ－４(南から)
ＳＩ－４掘り方（南から）
ＳＢ－１柱穴確認状況（南から）
ＳＢ－１(南から)
ＳＢ－１中央の柱穴土層断面（南から）
ＳＢ－２(北から)
ＳＢ－３(北東から)
ＳＫ－１(西から)
図版5
土器（土師器甕・小型甕、須恵器坏）
図版6
土器、瓦、石製品、鉄製品

はしがき

調査に至る経緯

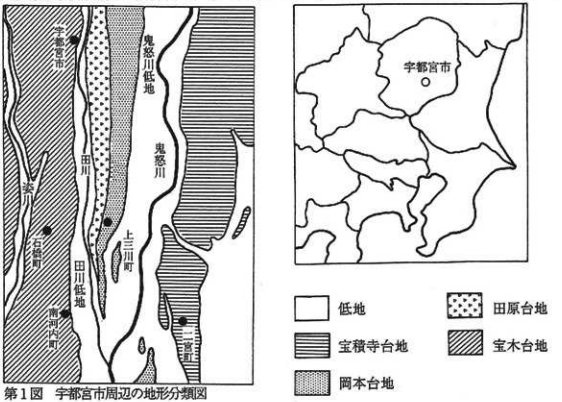
宇都宮市上戸祭町字前田402－2他に所在する石塚好一氏所有地（約2500㎡）に対して、宅地造成が計画された。当該地は『宇都宮市遺跡地図』（1997年改訂版）（注1）に「No.365，前田遺跡，古墳・奈良時代，集落跡」と記された周知の遺跡である。また、本跡の西側では上戸祭小学校の建設に伴い昭和62～63年に約15,000㎡が宇都宮市教育委員会（以下市教委）によって調査され、古墳～平安時代の住居跡161軒、掘立柱式建物跡98棟などが調査された（注2）。

今次調査区は前田遺跡の南東端にあたり、前回と同様に遺構の存在が推定された。しかし調査区の東側は宇都宮丘陵西斜面の裾部となっており、遺跡（集落）の範囲からはずれる可能性も予想された。そこで平成14年2月9日市教委によって実施された試掘調査によって、開発予定地の北側で竪穴住居跡3軒の他に柱穴や土坑が確認された。この試掘調査の成果をもとに、開発区域内の道路予定地と北側の擁壁部分の約300㎡対し発掘調査が必要とされた。その後に開発区域西側の隣接地（58㎡）が開発予定地区に加えられたが、この部分は前記の試掘調査の対象区域外であった。そのため道路部分の発掘調査と平行して表土除去を行い、遺構の有無を確認することとなった。その結果、竪穴住居跡1軒、掘立柱式建物跡1棟（部分）などが確認できたため、この部分も発掘調査の対象とされた。そこで市教委を調査主体者とし、調査実務は事業者（石塚好一氏、トヨタウッドユーホーム株式会社）の依頼を受けた日本窯業史研究所がこれにあたった。

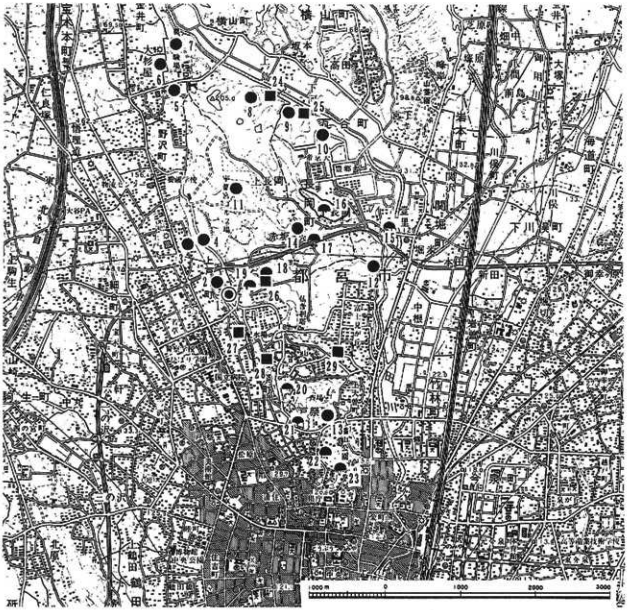
発掘調査の対象面積は約360㎡で、調査期間は平成14年4月15日～同年5月8日である。この間4月30日には市教委による立会いを受け、5月8日に埋め戻しを行い野外調査をすべて終了した。

遺跡の位置と環境

前田遺跡上戸祭小学校東地区は宇都宮市上戸祭町字前田394－1及び402－2番地に所在し、市内中心部の東武



第1図　宇都宮市周辺の地形分類図



番号	遺跡名	市番号	県番号	時期	種別	番号	遺跡名	市番号	県番号	時期	種別
1	前田遺跡上戸祭小学校東地区	365	2261	奈～平	集落跡	15	谷口山古墳群	55	2353	古	古墳
						16	瓦塚古墳群	54	2354	古	古墳
2	前田遺跡	365	2261	古～奈	集落跡	17	長岡百穴	53	2357	古	横穴墓
3	北原遺跡	49	2257	縄・古～平	集落跡	18	大ジノ古墳群	58	2361	古	古墳
4	上戸祭中ノ島遺跡	50	2258	縄・古	集落跡	19	大塚古墳群	57	2359	古	古墳
5	野沢石塚遺跡	31	2241	縄・弥	集落跡	20	山本山古墳群	68	3248	古	古墳
6	野沢遺跡	30	2239	縄～古	集落跡	21	戸祭山兜塚古墳群	344	3249	古	古墳
7	野沢北遺跡	29	2240	縄～古	集落跡	22	祥雲寺境内古墳	345	3252	古	古墳
8	桜畑遺跡	38	2335	縄・古	集落跡	23	八幡山古墳群	346	3253	古	古墳
9	欠の上遺跡	39	2336	縄・古	集落跡	24	広表窯跡	427	2334	奈・平	窯跡
10	瓦塚日裏北久保遺跡	40	2339	縄・古	集落跡	25	欠の上窯跡	426	2337	奈・平	窯跡
11	宇都宮ゴルフ場遺跡	48	2251	縄・古	集落跡	26	上戸祭大塚瓦窯跡	366	2360	奈	窯跡
12	田向遺跡	63	2365	縄・古	散布地	27	横河原瓦窯跡群	64	7139	奈	窯跡
13	戸祭兔田遺跡	71	3250	古	散布地	28	水道山瓦窯跡群	65	3245	奈	窯跡
14	百穴裏遺跡	52	2356	縄・古	集落跡	29	入畑窯跡	66	3246	江	窯跡

（市番号は宇都宮市遺跡地図の番号と一致する）

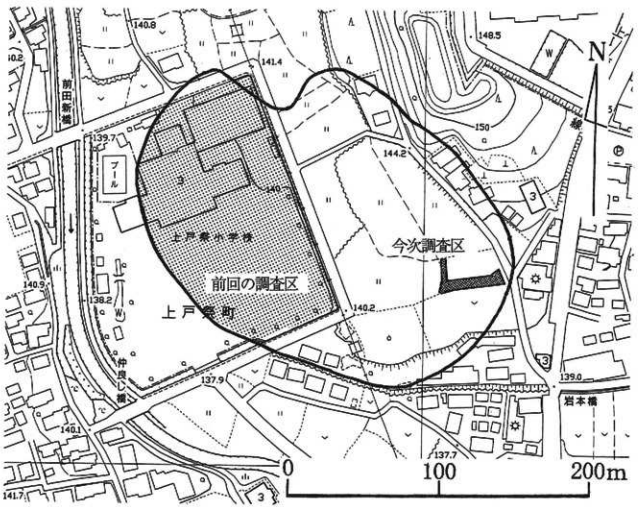
第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡

線宇都宮駅から北方約3.5kmの水田地帯に立地する。本遺跡は上戸祭町の北端にあたり、調査区の西方約500mに日光街道が、北方約300mには宇都宮環状線が通っている。さらに本調査区の北西方約180mには、昭和62年に上戸祭小学校建設に伴い調査が行われた前田遺跡（注２）が隣接している。

宇都宮市は栃木県の中央部に位置するとともに関東平野の北端に所在し、日光山地を源とする鬼怒川・大谷川・黒川などが形成する複合扇状地の扇端に立地している。そのため山地から平野部への転換点にあたり、市の北側には丘陵が見られるが、南側では平野が広がっている。

市内は南流する鬼怒川・田川・姿川などによって、岡本台地・田原台地・宝木台地などが形成されている。さらに、上河内町の高館山を北端とする宇都宮丘陵（標高160～200m）が、市内中心部の八幡山公園にむかって南北に延びており、今次の調査区はこの丘陵西斜面の裾部付近に立地している。この丘陵の基盤は第三期中新世の凝灰岩や砂岩などから成り、丘陵上にはローム層が堆積している。基盤の凝灰岩は比較的柔らかく、長岡石とも呼ばれており所々に露頭が見られる。

宇都宮丘陵は市内瓦谷町付近で一時的に東流する田川によって丘陵が北部と南部に分断されており、丘陵東側は急峻な崖面や開析谷が多くみられるのに対し西側は比較的緩やかな斜面となっている。宇都宮丘陵南部は東側を田川が、西側を釜川が南流しており丘陵の周囲には両者によって形成された田川低地が広がっている。前田遺跡は宇都宮丘陵南部の西縁に所在し、丘陵西斜面と釜川に挟まれた狭隘な緩斜面に所在している。今次調査区は釜川東岸の標高140m程の緩斜面に立地しており、前田遺跡の東限付近と思われる。周囲は宅地化が進むが雑木林や水田も多く残されており、当該地は休耕田で果樹が植えられていた。



第３図　前田遺跡の調査区配置図

本遺跡の周辺には、宇都宮丘陵と周囲の低地を利用して多くの遺跡が立地している。本跡の北方約3.5kmに位置する弥生時代の標識遺跡として知られる野沢遺跡をはじめ南方の水道山瓦窯跡など、釜川流域には各時代の集落跡や窯跡がみられる。また丘陵上には、戸祭山兜塚古墳群、瓦塚古墳群、大ジノ古墳群など多くの古墳が分布しており、本跡北東方約1kmには凝灰岩の崖面を利用して造られた横穴墓の長岡百穴が位置している。また釜川流域では丘陵斜面を利用して築かれた6ヶ所の窯跡が知られており、このうち入畑窯跡は近代のものと推定されているが他はいずれも古代のものである。本跡の南方約0.9kmに位置し下野薬師寺や同国分寺の供給瓦窯跡として知られる水道山瓦窯跡群をはじめとし、周辺には根河原瓦窯跡群、上戸祭大塚瓦窯跡などの瓦窯跡が分布する。また本跡の北東方約2.5kmには、須恵器を生産した広表窯跡と欠ノ上窯跡が所在している。これらの窯跡は丘陵の森林資源と周辺の水や粘土とともに、田川水系の水運を背景に営まれたものと思われる。前田遺跡では前回の調査成果から瓦窯操業時期に集落が拡大したと考えられ、大塚瓦窯跡と同一の叩具文字の瓦が出土するなど両者の密接な関係が窺える。

注1　宇都宮市遺跡地図（改訂版）　宇都宮市教育委員会　1997年11月

注2　前田遺跡　－宇都宮市立上戸祭小学校建設に伴う発掘調査－　宇都宮市文化財調査報告書　第29集
宇都宮市教育委員会　平成3年3月

層序

本遺跡は、釜川東岸の緩斜面に立地しており南東方向に傾斜している。また調査区は水田耕作によって削平を受けていたが、削平は北から南に向かって浅くなっていた。Ⅰ層は耕作土で水田として利用されていたが、水田の床土（酸化土層）が2層みられ改田が行なわれたと判断される。

Ⅱ層とⅢ層には七本桜軽石と今市軽石が混入するが、いずれも層状の堆積はみられなかった。またⅡ・Ⅲ層中にみられる七本桜軽石は径1～2cm程のブロック状で、径1～2mm程の粒状のスコリアから構成されていた。今市軽石は径1～2cm程のブロック状で、各埋積土中にみられる赤色スコリア粒はこれが風化分解したものと思われる。

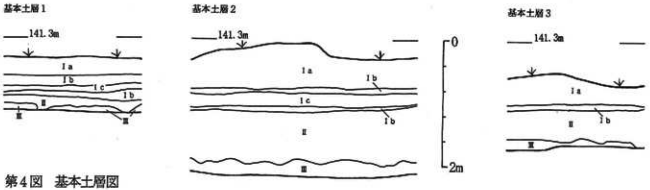
Ⅰa層　黒色土　　締まり弱い。（耕作土）　水田であったが、現在は果樹畑として利用されている。

Ⅰb層　暗赤褐色土　締まり強く硬質。（耕作土）　水田の床土。

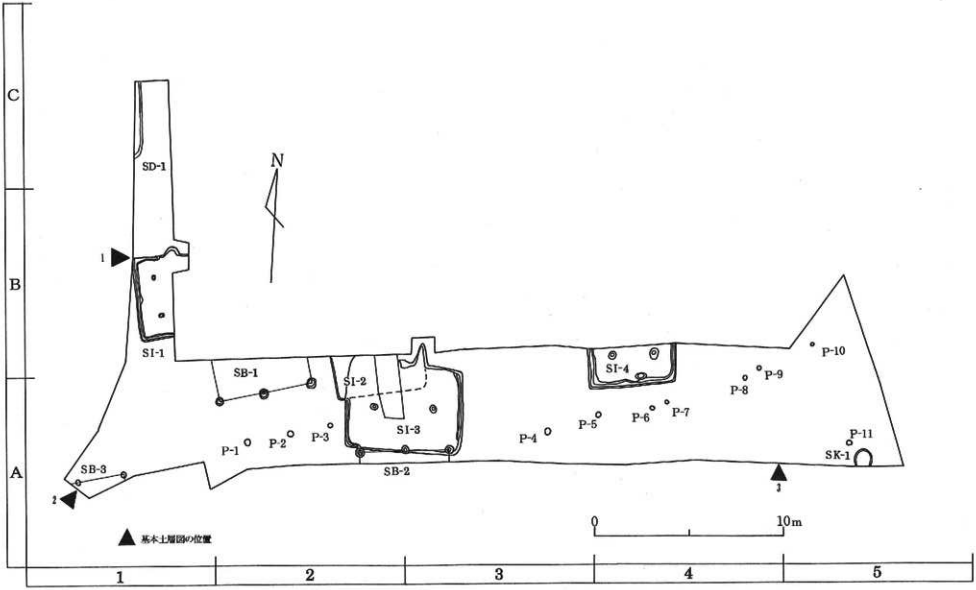
Ⅰc層　黒色土　　締まり強い。（耕作土）　改田前の水田耕作土。

Ⅱ層　黒褐色土　締まっていて、やや粘性がある。黄色スコリアブロック（七本桜軽石　径1～2cm）、赤色スコリア（今市軽石の細粒　径1～5mm）、ローム粒（径1～2mm）を微量混入する。

Ⅲ層　暗茶褐色土　締まり強い。（ローム漸移層）黄色スコリアブロック（七本桜軽石　径1～2cm）、赤色スコリア（今市軽石径1～2cm）を少量混入する。径1～2mmの黄色スコリア粒、赤色スリア粒、ローム粒を少量混入する。



第4図　基本土層図


C
B
A
1
2
3
4
5
N
SD-1
SI-1
SB-1
SI-2
SI-3
SB-2
SB-3
SI-4
P-1
P-2
P-3
P-4
P-5
P-6
P-7
P-8
P-9
P-10
P-11
SK-1
0
10m
基本土層図の位置

第5図　遺構配置図

遺構と遺物

竪穴住居跡

ＳＩ－１

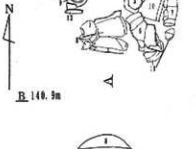
遺構（第６・７図、図版２）

調査区の北側のB-1グリットに位置し、住居東側は調査区外に延びていた。規模は南北4.48m、東西は確認できた南壁で1.7m程であった。壁はローム層に30～50cm程掘り込まれており、ほぼ垂直に立ち上がるが確認面付近で外頃していた。床面はローム土と茶褐色土の混合土を主として構築されており、西壁寄りの床面で２口の主柱穴を確認した。また壁溝は、北壁のカマド部分を除いて各壁下にみられ幅20、深さ９～14cm程で、貯蔵穴等は認められなかった。

カマドは北壁を幅1.5、長さ1.2m程掘り込んで施設されており、西袖が残存していた。西袖には、袖芯として利用された倒立の長胴甕と瓦片が残存しており、火床のほぼ中央には支脚に利用された瓦片(12)が立っていた。カマドの東袖は壊されていたが、袖芯として利用されたと思われる長胴甕片が散乱していた。そのなかの長胴甕(10)は、焚口の天井部の芯材として利用されたものと思われる。またカマド内から出土した土師器坏(３)は、内面の黒色処理が確存するためカマド廃絶後に埋置されたものと思われる。

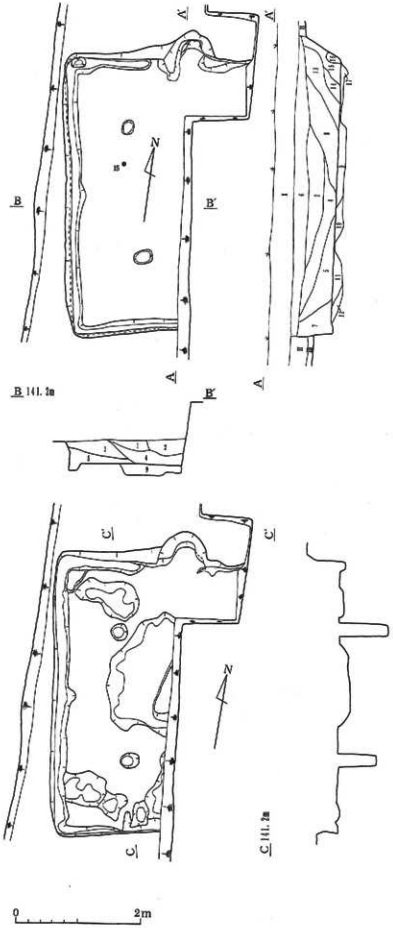
遺物（第８・９・10図、図版５・６）

遺物は土師器坏、甕、瓦、鉄製品などがみられるが、多くはカマド付近から出土した。15の鉄製品は床面上から出土しており、茎式削り鑿と考えられる。鑿身と刃部を欠損しており両関で、柄の木質が長さ7.5cm程残存していた。現存長6.1cm（木質部を除く）で、茎は長さ5.1、幅0.8、厚さ0.5cm、鑿身は残存長１、幅1.2、厚さ0.7cm程で、いずれも断面は長方形である。カマドに使用された12、13の瓦はいずれも男瓦片で、両者とも凹面に布目痕、凸面にナデ整形を行っていた。また14は女瓦で凸面の布目痕、凸面にナデ整形を行っていた。



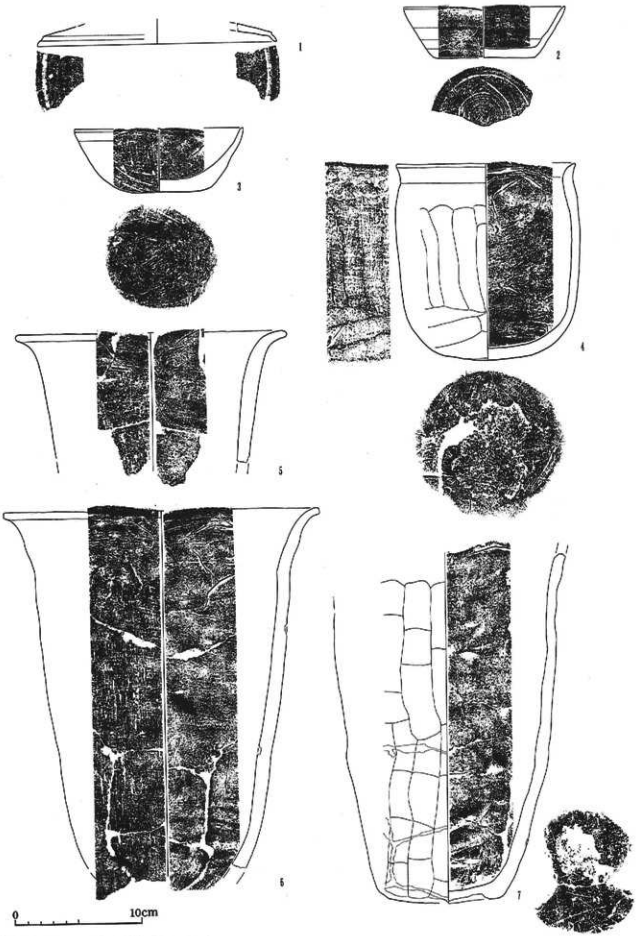
第６図　ＳＩ－１カマド実測図

13茶褐色土　締まりやや弱く粘性やや強い　ローム粒(1～5mm)混入　灰色粘土粒　(1～9mm)多量　焼土粒(1～2mm)微量　赤色スコリア(5～10mm)微量
14黒灰色土　締まりやや弱く粘性やや強い　被熱したローム粒(1～5mm)多量　焼土粒(1～2mm)微量　灰色粘土粒(1～2mm)少量
15黒褐色土　締まりやや弱く粘性やや強い　ローム粒(1～2mm)少量　灰色粘土粒(1～2mm)混入
16暗黄褐色土　締まりなく軟弱　ローム粒(3～4mm)混入　焼土粒(1～2mm)微量
17茶褐色土　被熱したローム粒(1～5mm)混入　焼土粒(1～3mm)少量　ロームブロック(1cm)少量
18黒褐色土　ローム粒(1～2mm)少量　灰色粘土粒(1～5mm)微量
19黒褐色土　しまりやや弱い　ローム粒(1～3mm)少量　炭化物粒(5～6mm)微量

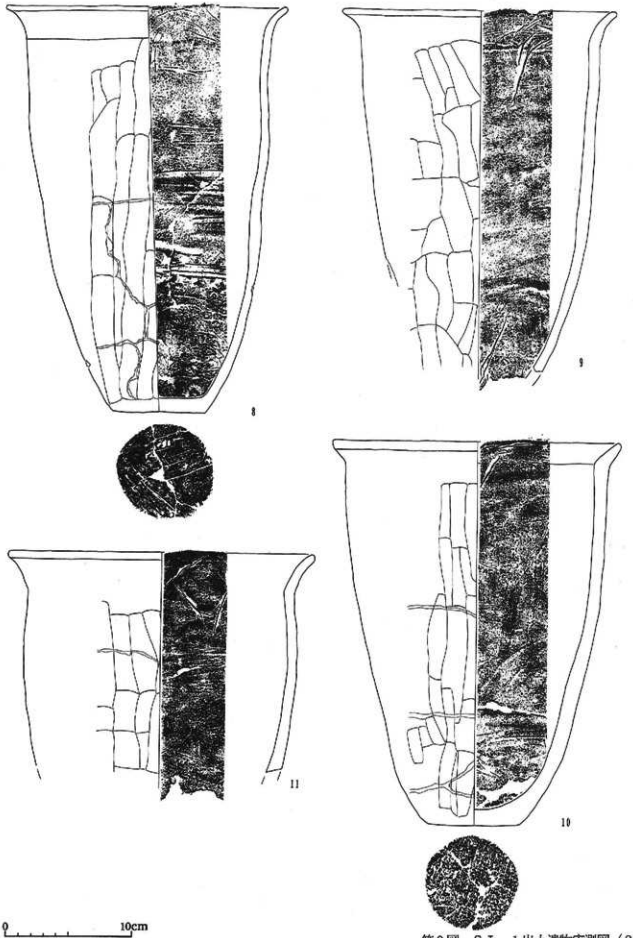


1 黒色土　ローム粒(1~2mm)混入　赤色スコリア(1~5mm)微量
2 黒色土　ローム粒(1~5mm)多量　赤色スコリア(1~5mm)微量
3 黒褐色土　ローム粒(1~2mm)混入　焼土粒(1~2mm)微量
4 茶褐色土　ローム粒(1~5mm)多量　焼土粒(1~2mm)微量　赤色スコリア(5~10mm)微量
5 暗茶褐色土　ローム粒(1~2mm)多量　焼土粒(1~2mm)微量　ロームブロック(1~2cm)微量
6 黒色土　ローム粒(1~5mm)混入　赤色スコリア(5~10mm)微量
7 暗褐色土　ローム粒(1~5mm)多量　ロームブロック(1~3cm)少量
8 黒褐色土　粘性やや強い　ローム粒(1~2mm)混入　灰色粘土粒(1~2mm)少量　焼土粒(1~2mm)微量　赤色スコリア(5~10mm)微量
9 茶褐色土　ローム粒(1~5mm)混入　ロームブロック(1~3cm)混入
10 暗黄褐色土　締まりやや弱い　ローム粒(1~5mm)多量　ロームブロック(1~2cm)少量
11 黒褐色土　ローム粒(1~5mm)混入　ロームブロック(1~3cm)微量
12 黒褐色土　ローム粒(1~2mm)多量　ロームブロック(3~5cm)微量

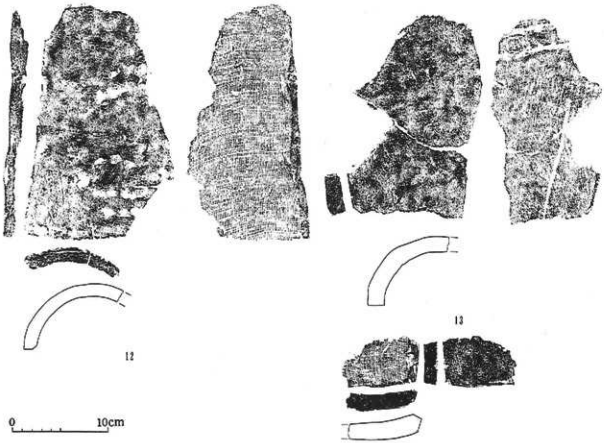
第7図　SI－1実測図



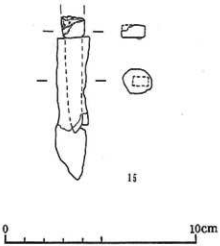
第8図　ＳＩ－１出土遺物実測図（1）



第9図　ＳＩ－１出土遺物実測図（２）



第10図　ＳＩ－１出土遺物実測図（３）



第１表　SI-１出土遺物観察表

遺物番号 器種・器形	寸法（cm）	胎土・焼成・色調	整形の特徴
SI-１－１ 須恵器　蓋	口径　19.0 器高　1.5	胎土　砂粒・白色粒 焼成　良 色調　明灰色	ロクロ整形
SI-１－２ 土師器　坏	口径　13.0 器高　4.0 底径　8.2	胎土　細砂粒・白色粒 焼成　良 色調　灰色	ロクロ整形、底部外面右回転のヘラ削り
SI-１－３ 土師器　坏	口径　13.4 器高　15.0 底径　15.5	胎土　細砂粒・石英粒・白色粒 焼成　良 色調　外 暗褐色　内 黒色	口辺部内横ナデ、体部外面縦の手持ちヘラ削り後ヘラナデ、底部外面手持ちヘラ削り、内面ミガキ後黒色処理
SI-１－４ 土師器　甕	口径　14.4 器高　15.6 底径　3.0	胎土　砂粒・石英粒・白色粒 焼成　良 色調　暗褐色	口辺部内外面横ナデ、体部外面縦のヘラ削り、体部外面下半は横のヘラ削り、内面ヘラナデ

遺物番号 器種・器形	寸法（cm）	胎土・焼成・色調	整形の特徴
SI-1－5 土師器　甕	口径　21.5 器高　10.4 底径　－	胎土　砂粒・石英粒・白色粒 焼成　良 色調　暗茶褐色	口辺部内外面横ナデ、体部外面縦のヘラ削り、内面ヘラナデ
SI-1－6 土師器　甕	口径　25.2 器高　28.4 底径　－	胎土　砂粒・石英粒 焼成　良 色調　暗褐色	口辺部内外面横ナデ、体部外面縦のヘラ削り、内面ヘラナデ
SI-1－7 土師器　甕	口径　－ 器高　27.6 底径　10.0	胎土　砂粒・石英粒 焼成　良 色調　暗褐色	体部外面縦ヘラ削り、底部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ
SI-1－8 土師器　甕	口径　22.4 器高　32.1 底径　7.2	胎土　砂粒・石英粒・白色粒 焼成　良 色調　暗褐色	口辺部内外面横ナデ、体部外面縦のヘラ削り、底部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ
SI-1－9 土師器　甕	口径　22.0 器高　28.5 底径　－	胎土　砂粒・石英粒・白色粒 焼成　良 色調　暗褐色	口辺部内外面横ナデ、体部外面縦のヘラ削り、内面ヘラナデ
SI-1－10 土師器　甕	口径　23.0 器高　30.4 底径　7.2	胎土　砂粒・石英粒・白色粒 焼成　良 色調　暗褐色	口辺部内外面横ナデ、体部外面縦のヘラ削り、底部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ
SI-1－11 土師器　甕	口径　24.4 器高　17.2 底径　－	胎土　細砂粒・石英粒 焼成　良 色調　暗褐色	口辺部内外面横ナデ、体部外面縦のヘラ削り、内面ヘラナデ

ＳＩ－２

遺構（第11・12図、図版３）

調査区中央のB-2グリットに位置し、住居北側は調査区外に延びていた。また住居の南側はSI-3と重複しこれによって切られていた。このため、本跡は西壁と床面の一部が残存する程度である。調査し得た規模は西壁で南北方向が2.32m、東西方向は南壁が壊されているが5ｍ程であった。壁はローム層中に20cm程掘り込んでおり、床面はローム土と黒色土の混合土を主として構築されていた。柱穴は住居荒掘り面で、P15（深さ59cm）とP16（深さ33cm）の２口を確認した。床面の大部分がSI-3に壊されているため、拡張等の有無は不明である。しかし、南壁の西側で壁溝と思われる幅15、深さ４～10cm程の溝状の掘り込みが認められるため、南壁の拡張が行なわれた可能性がある。また南壁中央付近のP2（深さ13cm）はその位置と規模から、本跡の入り口施設の痕跡と思われる。しかしSI-3に伴う可能性も考えられ、試掘トレンチにより上部が失われているため判じ難い。本跡からの遺物の出土はみられなかった。

ＳＩ－３

遺構（第11・12・13図、図版３）

調査区中央のA-2･3グリットに位置し、SI-2を切っておりまたSB-2に切られていた。２回の拡張が行われているが、いずれも南壁を共有していた。カマドも１回の造り替えが行われているが、どちらも北壁に施設されていた。

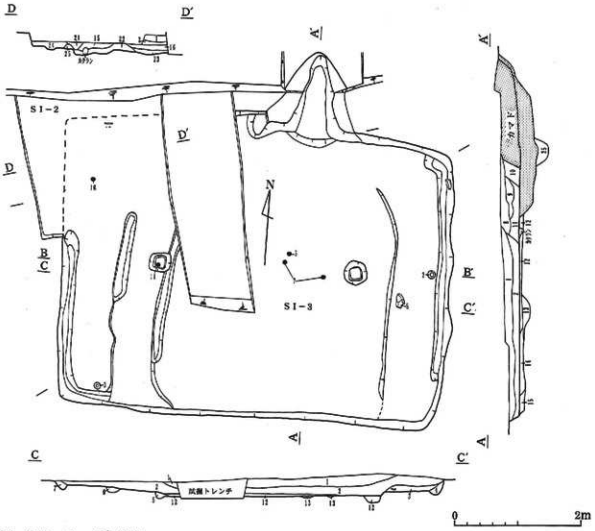
１期　規模は、東西3.7×南北3.7ｍ程の方形の平面と推定される。西壁下から南東隅に壁溝がみられ、幅１２～18、深さ４cm程であった。南壁中央付近では入り口施設と思われるP3（深さ14cm）を確認した。カマドや貯蔵穴等は確認できなかった。しかし北壁中央付近にカマド掘り方の痕跡と推定されるP4（深さ17cm）がみられるため、２期に北壁を拡張する際にカマドも移設されたものと考える。また、荒掘り面で確認したP1（深さ13cm）、P2（深さ13cm）、P4（深さ17cm）はいずれも１期の住居に伴うと思われるが、P2はSI-2に伴う可能性もある。

２期　住居の東壁を80、北及び西壁を90cm程拡張しており、規模は東西5.3×南北4.45ｍ程の長方形の平面となる。壁溝は東・西壁下にみられ、幅10～18、深さ４～８cmであった。カマドは北壁中央付近を幅144、長さ106cm程掘り込んで施設されていた。両袖とも遺存しており灰白色粘土を主体として構築されていた。火床はよく焼

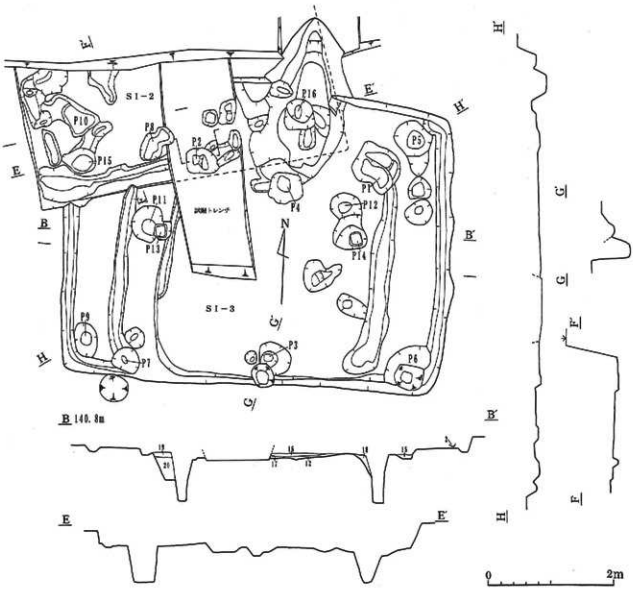
けており支脚が残存していた。支脚は土器を使用せずに、土塊状の粘質土の頂部に土器片を置いたものを使用していた。両袖ともに袖芯としてブロック状の凝灰岩の切石が使用されていた。西袖の切り石は高さ33、下幅19、上幅16、厚さ６～７㎝程の台形状で、東袖のものは上部を欠損するが同様の形状と思われる。これらの凝灰岩は非常に脆く、取り上げようとすると砕けてしまう程であった。カマド周辺や住居の埋積土中からも凝灰岩の破片が出土しており、カマド天井部などにも使用されたと思われる。

荒掘り面では住居の四隅にP5（深さ24㎝）、P6（深さ３㎝）、P7（深さ10㎝）、P8（深さ14㎝）の小穴がみられ、カマド下で確認したP16は先行するSI-2の柱穴である。またP6は小穴とするにはかなり浅いが、SB-2の東端の柱穴により切られているため、もっと深かった可能性もある。P-3は引き続き使用されたものと思われるが、主柱穴や貯蔵穴はみられなかった。

３期　住居西壁のみを80㎝程拡張していた。規模は東西6.16×南北4.48ｍ程の長方形の平面で、面積は１期の約２倍となっている。壁溝は東・西壁下にみられ、幅20、深さ４～６㎝程であった。床面はローム土と黒色土を主として構築されていた。また、荒掘り時にP9（深さ7㎝）、P10（深さ17㎝）を掘り込んでおり、意識的に住居のコーナー付近に掘り込んだと思われる。カマドは２期のものを引き続き使用したと思われるが、同位置に造り替えを行ったことも考えられる。この段階でP-11～14の２本柱の主柱穴がみられる。それぞれ重複が認められるため同規模での建て替えが推察される。

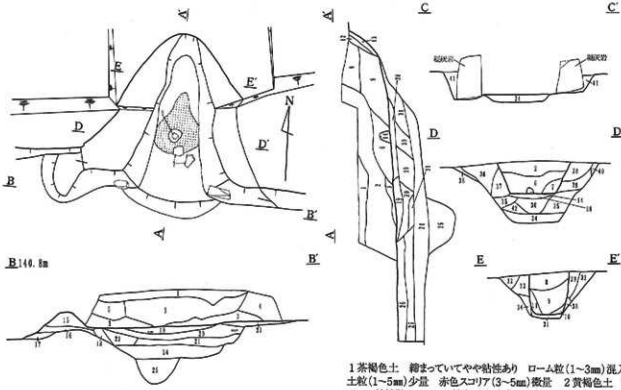


第11図　ＳＩ－２・３実測図



1黒褐色土　ローム粒(1～5mm)多量　赤色スコリア(5～6mm)微量　2茶褐色土　ローム粒(1～3mm)多量　焼土粒(1～2mm)微量　赤色スコリア(5～6mm)微量　3黒褐色土　ローム粒(1～2mm)混入　4茶褐色土　締まりやや弱い　ローム粒(1～2mm)多量　5茶褐色土　ローム粒(1～5mm)多量　6黒褐色土　締まり強い　ローム粒(1～2mm)混入　ロームブロック(1～2cm)微量　7黒褐色土　ローム粒(1～2mm)少量　8暗茶褐色土　ローム粒(1～2mm)混入　焼土粒(1～5mm)少量　9茶褐色土　ローム粒(1～5mm)多量　ロームブロック(2～3cm)微量　焼土粒(1～5mm)少量　10暗黄褐色土　ローム粒(1～5mm)多量ロームブロック(1～3cm)少量　焼土粒(1～5mm)少量　11黒褐色土　ローム粒(1～5mm)多量　焼土粒(1～5mm)少量　12黒褐色土　締まり強く硬質　ローム粒(1～2mm)混入　焼土粒(1～2mm)少量　ロームブロック(1～2cm)少量　赤色スコリア(1～5mm)微量　13暗黄褐色土　締まり強く硬質　ローム粒(1～2mm)混入　ロームブロック(3～5cm)混入　14黒色土　締まり強く硬質　ローム粒(1～2mm)少量　ロームブロック(1～7cm)少量　赤色スコリア(1～5mm)少量15黒色土　締まり強く硬質　ローム粒(1～5mm)混入　ロームブロック(1cm)微量　16黒色土　締まり強く硬質　ローム粒(1～5mm)少量　ロームブロック(1～3cm)微量　焼土粒(1～2mm)少量　赤色スコリア(1～5mm)少量　17黒色土　締まり強い　ローム粒(1～5mm)混入　ロームブロック(1cm)少量　灰色粘土粒(1～2mm)少量　赤色スコリア(4～5mm)微量　18黒褐色土　締まりやや弱くぼろぼろしている　ロームブロック(3～7cm)混入　ローム粒(1～5mm)混入　19茶褐色土締まり強い　ローム粒(1～2mm)多量　ロームブロック(5～6cm)混入　20茶褐色土　ローム粒(1～2mm)多量　ロームブロック(5～6cm)混入21茶褐色土　締まりやや弱い　ローム粒(1～9mm)混入　22黒色土　締まり強い　ローム粒(1～5mm)多量　ロームブロック(2～8cm)混入　23暗茶褐色土ローム粒(1～5mm)多量　ロームブロック(1～5cm)混入　赤色スコリア(1～3mm)少量　24黒色土　締まり強い　ローム粒(1～5mm)混入　ロームブロック(3～7cm)少量　焼土粒(3～5mm)微量　赤色スコリア(1～5mm)微量　25暗褐色土　ローム土とロームブロック(1～2cm)の混合土

第12図　ＳＩ－２・３掘り方実測図

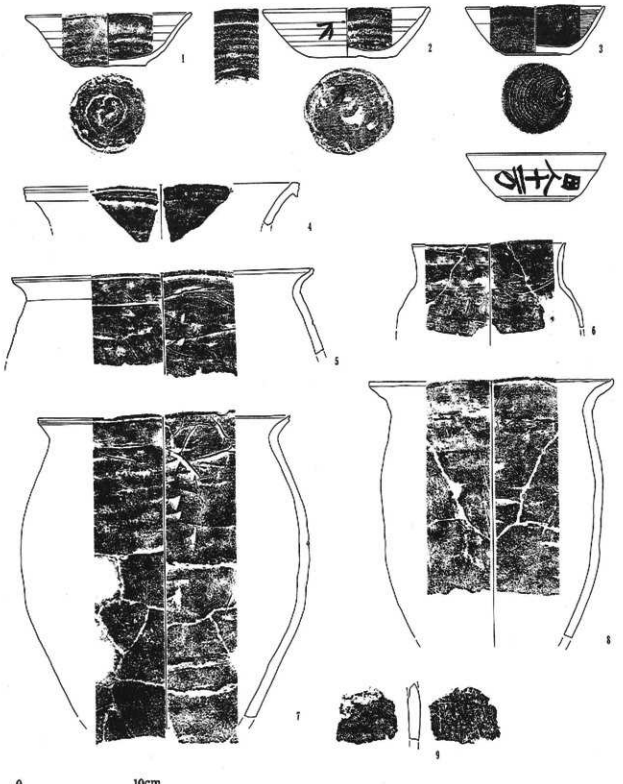


1茶褐色土　締まっていてやや粘性あり　ローム粒(1～3mm)混入　焼土粒(1～5mm)少量　赤色スコリア(3～5mm)微量　2黄褐色土　締まっていて粘性強い　ローム粒(1～2mm)多量　焼土粒(3～5mm)少量　ロームブロック(1～3cm)微量　黄灰色粘土粒(1～5mm)多量　3茶褐色土　締まりやや弱い　ローム粒(1～2mm)少量　焼土粒(3～5mm)微量　黄灰色粘土粒(3～5mm)少量　4黒褐色土　締まりやや弱く粘性あり　ローム粒(1～5mm)少量　焼土粒(4～5mm)少量　黄灰色粘土粒(1～2mm)少量5茶褐色土　締まっていて粘性あり　ローム粒(1～5mm)少量　焼土粒(4～5mm)少量　黄灰色粘土粒(1～5mm)少量　ロームブロック(1～2cm)微量　6茶褐色土　締まりやや弱く粘性あり　焼土粒(4～5mm)混入　黄灰色粘土粒(1～2mm)少量　7灰褐色土　締まり弱く粘性強い　焼土粒(1～3mm)混入　灰色粘土粒(1～2mm)多量　8赤褐色土　締まっている　焼土粒(1～5mm)混入　黄灰色粘土粒(1～3mm)混入　9暗赤褐色土　締まっている　焼土粒(1～9mm)多量　焼土ブロック(1cm)少量　黄灰色粘土粒(1～2mm)少量　10赤褐色土　締まり弱い　焼土粒(1～2mm)多量　11黒褐色土　焼土粒(1～3mm)混入　黄灰色粘土粒(1～2mm)少量　12赤褐色土　焼土粒(1～2mm)多量　黄灰色粘土粒(1～2mm)混入　13黒褐色土　ローム粒(1～2mm)微量　焼土粒(1～2mm)微量　黄灰色粘土粒(1～2mm)微量　14灰色粘土　締まっているがザクザクしている　灰色粘土を主体とし焼土粒(1～2mm)を微量含む　15黄褐色粘土　締まっていて粘性強い　赤色スコリア(5～6mm)少量　16黒色土　締まり強い　ローム粒(1～5mm)混入　ロームブロック(1～2cm)少量　赤色スコリア(2～3mm)微量　17黒色土　ローム粒(1～5mm)混入　18茶褐色土　ローム粒(1～2mm)多量　焼土粒(1～2mm)少量　赤色スコリア(5～6mm)微量　19暗茶褐色土　ローム粒(1～2mm)多量　焼土粒(1～2mm)少量　赤色スコリア(5～6mm)微量　20暗赤褐色土　ローム粒(1～2mm)微量　焼土粒(1～5mm)混入　赤色スコリア(5～10mm)微量　21黒色土　締まりやや弱い　ローム粒(1～2mm)少量　焼土粒(1～2mm)少量　22黒褐色土　ローム粒(1～2mm)少量　焼土粒(1～2mm)少量　ロームブロック(1cm)少量　23茶褐色土　締まり強い　ローム粒(1～2mm)少量　焼土粒(1～5mm)少量　黄灰色粘土粒(1～2mm)少量　24暗茶褐色土　締まり強い　ローム粒(1～5mm)混入　ロームブロック(1～2cm)少量　赤色スコリア(5～6mm)微量　25黒茶褐色土　ローム粒(1～2mm)混入　ロームブロック(1～3cm)微量　26黒褐色土　締まり強い　ローム粒(1～3mm)混入　焼土粒(1～2mm)微量　赤色スコリア(5～6mm)微量　27茶褐色土　ローム粒(1～5mm)多量　ロームブロック(1cm)微量　赤色スコリア(5～6mm)微量　28暗赤褐色土　締まりやや弱い　焼土粒(1～5mm)混入　ローム粒(1～2mm)微量　29茶褐色土　締まりやや弱い　焼土粒(1～2mm)少量　ロームブロック(1～2cm)微量　黄灰色粘土粒(1～2mm)混入　30黒褐色土　締まりやや弱い　焼土粒(1～2mm)混入　赤色スコリア(5～10mm)微量　黄灰色粘土粒(1～2mm)少量　31暗赤褐色土　締まりやや弱くぼろぼろしている　ローム粒(1～2mm)少量　焼土粒(1～5mm)混入　焼土ブロック(1～2cm)微量　32黒褐色土　締まり強い　ローム粒(1～5cm)少量　焼土粒(1～2mm)微量　赤色スコリア(5～6mm)微量　33茶褐色土　締まり強い　ローム粒(1～9mm)多量　焼土粒(1～5mm)少量　34黒褐色土　ローム粒(1～2mm)微量　焼土粒(1～5mm)少量　35暗赤褐色土　焼土粒(1～2mm)多量　36黄褐色粘土　締まり強く硬質　ローム粒(3～5mm)微量　焼土粒(1～5mm)微量　37赤褐色土　締まり強く硬質　ローム粒(1～2mm)多量　焼土粒(1～5mm)微量　灰色粘土ブロック(1～3cm)少量　38暗赤褐色土　締まり強く硬質　焼土粒(1～5mm)多量　39暗赤褐色土　締まり強く硬質　焼土粒(1～5mm)多量　ローム粒(1～2mm)微量　ロームブロック(1cm)微量　40黒色土　ローム粒(1～2mm)混入　ローム粒(1～2mm)混入　赤色スコリア(1～2mm)微量　41暗茶褐色土　締まりやや弱い　ローム粒(1～2mm)多量　42暗赤褐色土　締まりやや弱い　焼土粒(1～5mm)多量　黄褐色粘土粒(1～2mm)少量

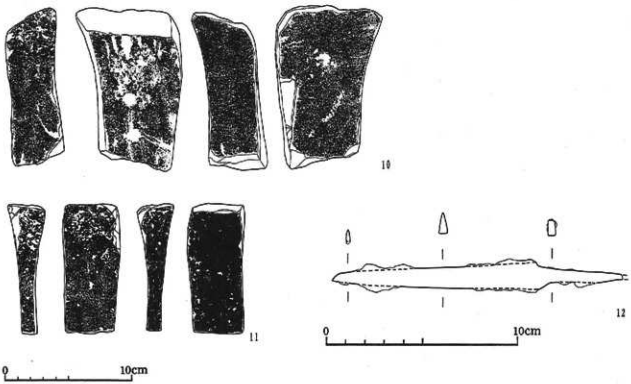
第13図　ＳＩ－３カマド実測図

遺物（第14・15図、図版6）

出土した遺物はいずれも3期のもので、須恵器の坏・甕、土師器の坏・甕などが出土している。床面付近から出土した2、3は土師器の坏で、2には「万」、3には「田人十一万」の墨書がみられた。また、12は鉄製の刀子で床面から出土しており、両関で茎の先端を欠損し現存長154㎜である。刃部長109、幅は関側で14、切先側で5、厚さが2～4㎜であった。茎は、現存長45、幅4～7、厚さが4㎜程であった。



第14図　ＳＩ－３出土遺物実測図（1）



第15図　ＳＩ－３出土遺物実測図（２）

第２表　SI-3出土遺物観察表

遺物番号 器種・器形	寸法（cm）	胎土・焼成・色調	整形の特徴
SI-3－１ 須恵器　坏	口径　13.3 器高　4.2 底径　5.9	胎土　白色粒 焼成　良 色調　暗灰色	ロクロ整形、底部は右回転のヘラ起し
SI-3－２ 須恵器　坏	口径　13.4 器高　3.9 底径　7.2	胎土　微砂粒・白色粒 焼成　良 色調　暗黄褐色	ロクロ整形、底部手持ちヘラ削り、体部及び底部外面に「万」の墨書あり
SI-3－３ 土師器　坏	口径　11.2 器高　3.6 底径　5.0	胎土　微砂 焼成　良 色調　外 明赤褐色　内 黒色	ロクロ整形、底部糸切り、内面ミガキ後黒色処理、体部外面に「田人十一万」の墨書あり
SI-3－４ 須恵器　甕	口径　22.0 器高　3.1 底径　－	胎土　砂粒・石英粒・白色粒 焼成　良 色調　淡赤褐色	ロクロ整形
SI-3－５ 土師器　甕	口径　24.1 器高　6.5 底径　－	胎土　黒雲母粒・白色粒 焼成　良 色調　淡赤褐色	口辺部内外面横ナデ、体部外面縦のナデ、内面ヘラナデ
SI-3－６ 土師器　甕	口径　12.2 器高　6.7 底径　－	胎土　微砂粒 焼成　良 色調　暗赤褐色	口辺部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ
SI-3－７ 土師器　甕	口径　20.0 器高　23.7 底径　－	胎土　砂粒 焼成　良 色調　明赤褐色	口辺部外面横ナデ、体部外面縦のヘラ削り、内面ヘラナデ、
SI-3－８ 土師器　甕	口径　19.6 器高　20.5 底径　－	胎土　砂粒・黒雲母粒 焼成　良 色調　明褐色	口辺部内外面横ナデ、体部外面縦のヘラ削り、内面ヘラナデ
SI-3－９ 土師器　甕	口径　－ 器高　－ 底径　－	胎土　砂粒・石英粒 焼成　良 色調　明褐色	体部外面は縦のヘラ削り、内面ヘラナデ

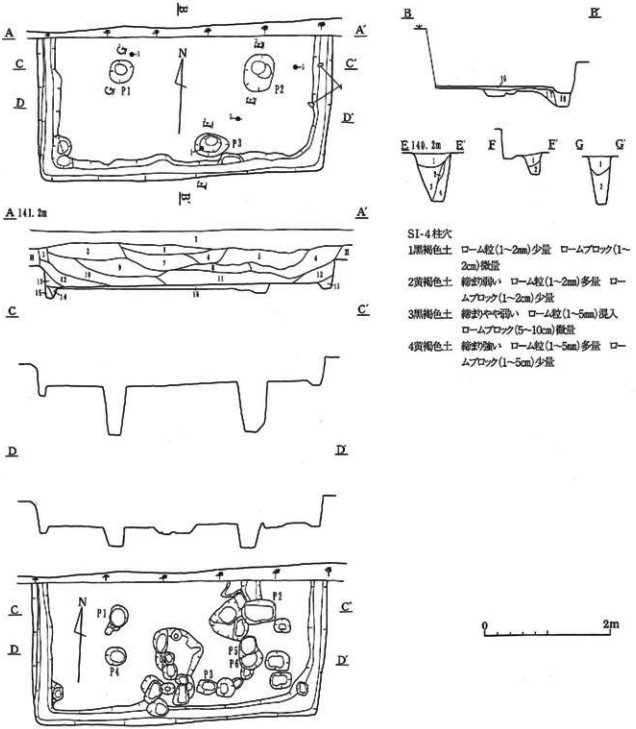
ＳＩ－４

遺構（第16図、図版４）

調査区東側のB-4グリットに位置し、住居の北側は調査区外に延びていた。規模は東西4.58mで、南北は確認

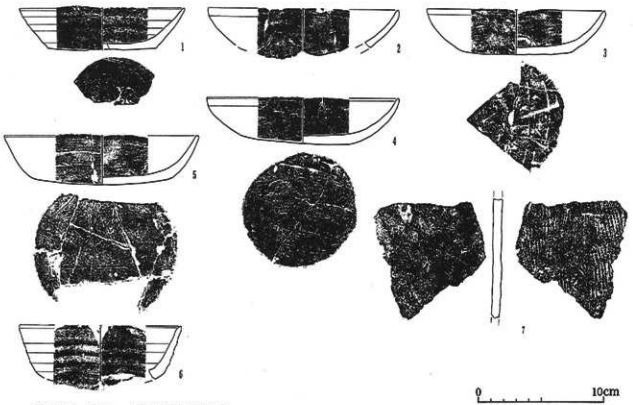
できた西壁で2.16mである。壁はローム層を35～40cm掘り込んでおり、ほぼ垂直に立ち上がる。床面はローム土と黒褐色土の混合土を主として構築されており、締まっていて硬質であった。壁溝は各壁下にみられ幅20、深さ10cm程であった。主柱穴は床面でP1（深さ75cm）、P2（深さ78cm）の２口を確認したが、貼床下から先行するP4（深さ38cm）、P5（深さ38cm）、P6（深さ36cm）を確認した。P5とP6は、規模が類似するため建て替えが行われたと推察される。また南壁中央付近で入り口施設と思われるP3（深さ34cm）を確認した。本跡は当初４本柱での主柱穴であったものが東西方向の２本柱に立て替えられたものと思われるが、全体を調査し得なかったため断定し難い。

遺物は須恵器・土師器の坏などが出土した。



第16図　ＳＩ－４実測図

1黒褐色土　ローム粒(1～3mm)少量　2黒褐色土　ローム粒(1～5mm)多量　灰色粘土粒(1～2mm)微量　3黒褐色土　ローム粒(1～2mm)微量　赤色スコリア(1～2mm)微量　4黒褐色土　ローム粒(1～5mm)多量　ロームブロック(1～2cm)少量　灰色粘土粒(1～5mm)多量　灰色粘土ブロック(1～2cm)少量　5茶褐色土　ローム粒(1～5mm)多量　ロームブロック(1～2cm)混入　灰色粘土粒(1～2mm)少量　赤色スコリア(1～2mm)少量　6暗茶褐色土　ローム粒(1～2mm)多量　ロームブロック(1cm)微量　赤色スコリア(1～2mm)微量　7黒褐色土　ローム粒(1～9mm)多量　ロームブロック(1～10cm)微量　灰色粘土粒(1～2mm)少量　灰色粘土ブロック(1～2cm)微量　8黒褐色土　ローム粒(1～5mm)混入　灰色粘土粒(1～5mm)混入　灰色粘土ブロック(1～2cm)少量　9暗茶褐色土　ローム粒(1～5mm)多量　ロームブロック(1cm)微量　灰色粘土粒(1～2mm)微量　10暗茶褐色土　ローム粒(1～5mm)多量　11暗茶褐色土　ローム粒(1～2mm)多量　ロームブロック(1～3cm)微量　灰色粘土粒(1～2mm)多量　12黒褐色土　ローム粒(1～2mm)混入　13黒褐色土　締まりやや弱い　ローム粒(1～2mm)多量　14茶褐色土　締まりやや弱い　ローム粒(1～9mm)多量　ロームブロック(1cm)微量　15黒茶褐色土　締まりやや弱い　ローム粒(1～5mm)混入　16黒茶褐色土　締まっていて硬質　ローム粒(1～2mm)多量　ロームブロック(1～2cm)微量　焼土粒(1～2mm)微量　17黄褐色土　締まっていて硬質　ローム粒(1～2mm)多量　ロームブロック(1～3cm)混入　18黒茶褐色土　締まっていて硬質　ローム粒(1～2mm)混入　ローム粒(1～5mm)微量



第17図　ＳＩ－４出土遺物実測図

第３表　SI-４遺物観察表

遺物番号 器種・器形	寸法（cm）	胎土・焼成・色調	整形の特徴
SI-４－１ 須恵器　坏	口径　13.0 器高　3.3 底径　8.4	胎土　白色粒 焼成　良 色調　青灰色	ロクロ整形、底部左回転のヘラ起し
SI-４－２ 土師器　坏	口径　15.2 器高　3.0 底径　－	胎土　細砂粒 焼成　良 色調　明赤褐色	口辺部外面横ナデ、体部外面横の手持ちヘラ削り、内面ヘラミガキ
SI-４－３ 土師器　坏	口径　14.2 器高　3.6 底径　6.0	胎土　細砂粒 焼成　良 色調　赤褐色	口辺部外面横ナデ、体部外面横の手持ちヘラ削り、底部手持ちヘラ削り、内面ヘラミガキ
SI-４－４ 土師器　坏	口径　15.2 器高　3.6 底径　8.6	胎土　細砂粒・白色粒 焼成　良 色調　赤褐色	口辺部外面横ナデ、体部外面横の手持ちヘラ削り、底部外面手持ちヘラ削り
SI-４－５ 土師器　坏	口径　15.4 器高　3.9 底径　6.6	胎土　細砂粒 焼成　良 色調　明黄褐色	口辺部外面横ナデ、体部外面横の手持ちヘラ削り、底部外面手持ちヘラ削り、内面ヘラミガキ
SI-４－６ 土師器　坏	口径　12.8 器高　4.2 底径　－	胎土　砂粒・白色粒 焼成　良 色調　暗茶褐色	ロクロ整形、内面ヘラミガキ
SI-４－７ 須恵器　甕	口径　－ 器高　－ 底径　－	胎土　石英粒・白色粒 焼成　良 色調　青灰色	外面に平行叩き目、内面ナデ

掘立柱式建物跡

ＳＢ－１（第18図、図版４）

調査区西側のB-2リットに位置し、SI-2·3の西に隣接していた。柱穴は梁行と思われる建物跡の柱穴３口を確認したが、遺構の大部分は北側の調査区外に延びると推定される。南北棟とした場合には梁行が２間で4.91m、柱間寸法は2.39＋2.53mで中軸方位はN-18°-Wであった。

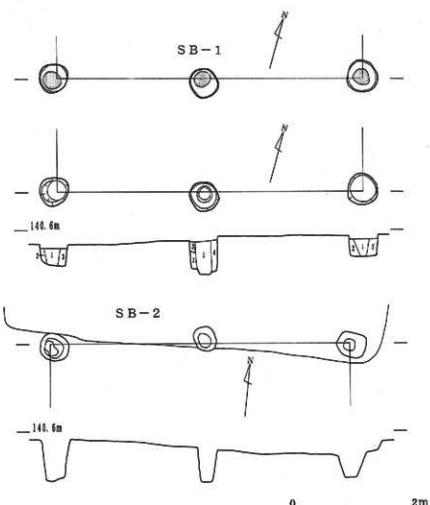
柱穴はほぼ円形の平面で、径41～50、深さ34～55cm程である。中央の柱穴のみ深さ55cmと、他のものより20cm程深いため棟持柱と考え南北棟を推定した。またいずれの柱穴にも、径20～30cm程の柱痕跡がみられたが、遺物の出土はみられなかった。

ＳＢ－２（第18図、図版４）

調査区西側のA-2·3グッリトに位置する。住居SI-3と重複しているが、本跡が先行する。柱穴は３口を確認したが、遺構の大部分は南側の調査区外に延びていると推定される。南北棟とした場合には梁行が２間で４.75m、柱間寸法は2.46+2.29m程で中軸方位はN-2°-Eであった。柱穴は不整円形の平面で、径40～46、深さ58～65cm程であった。遺物の出土はみられなかった。

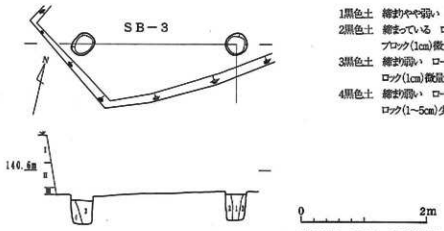
ＳＢ－３（第19図、図版４）

調査区南西端のA-1グリットに位置する。柱穴は２口を確認したのみで、大部分が南側の調査区外に延びていると推定される。柱間寸法は2.46m、南北棟とした場合の中軸方位はN-15°-Eであった。柱穴はほぼ円形の平面で、径30～36、深さ44cm程で西側の柱穴には径20cm程の柱痕跡がみられた。遺物の出土はみられなかった。



SB-1
1黒色土　締まりやや弱い　ローム粒(1～3mm)混入　ロームブロック(1～2cm)少
2黒褐色土　締まりやや弱い　ローム粒(1～2mm)少量　ロームブロック(1cm)少量
3黒色土　締まりやや弱い　ローム粒(1～2mm)混入
4黒色土　締まりやや弱い　ローム粒(1～5mm)多量　ロームブロック(1～3cm)少量
5黒色土　締まり弱い　ローム粒(1～5mm)少量

第18図　ＳＢ－１・２実測図



1黒色土　締まりやや弱い　ローム粒(1~5mm)少量
2黒色土　締まっている　ローム粒(1~2mm)少量　ロームブロック(1cm)微量
3黒色土　締まり弱い　ローム粒(1~2mm)多量　ロームブロック(1cm)微量
4黒色土　締まり弱い　ローム粒(1~2mm)多量　ロームブロック(1~5cm)少量

第19図　SB－3実測図

土坑

SK－1（第20図、図版4）

調査区南東端のA-5グリットに位置し、土坑の南側は調査区外に延びていた。平面は不整円形で径108、深さ16cm程であった。壁はやや外傾しており、底面は平らで断面は鍋底状であった。遺物の出土はみられなかった。

小穴

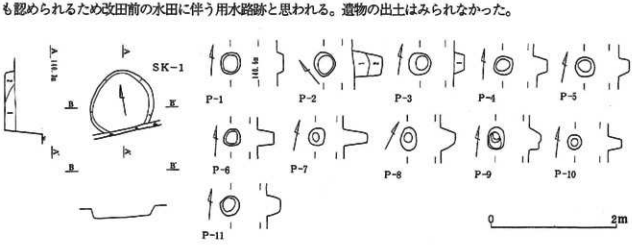
P－1～P－11（第20図、図版1）

調査区の中央から東側にかけて11口を確認した。いずれも不整円形の平面で、径22~34、深さ11~34cm程であった。全体的には南西－北東方向に並ぶ傾向がみられたが、地境や柵列等とは考え難い。特にP1～P3はSB-1と平行するが、建物跡の庇柱等ではなかった。また遺物の出土はみられなかった。

溝跡

SD－1（第5図）

調査区北側のC-1グリットに位置し、北・西側は調査区外に延びていた。確認できたのは、長さ4m、幅30~45、深さ3～4cm程である。土層断面ではこの溝を現在の水田の床土下で確認しており、さらに下層には改田前の床土も認められるため改田前の水田に伴う用水路跡と思われる。遺物の出土はみられなかった。



SK-1
1黒褐色土　締まり強い　ローム粒(1~5mm)少量　赤色スコリア(1~5mm)少量
2黒褐色土　締まり強い　ローム粒(5~6mm)少量　赤色スコリア(1~2mm)微量

P-2
1黒褐色土　締まりやや弱い　ローム粒(1~5mm)少量　ロームブロック(1cm)微量
2黒褐色土　締まりやや弱い　ローム粒(1~3mm)混入　ロームブロック(1cm)微量

P-3
1暗茶褐色土　締まり強い　ローム粒(1~2mm)混入　赤色スコリア(1~9mm)微量

第20図　SK－1及びP－1～11実測図

まとめ

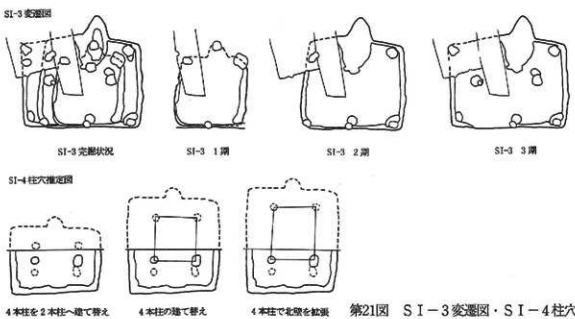
今回の調査で確認した遺構は、住居跡４軒、掘立柱式建物跡３棟、土坑１口、小穴11口、溝１条であったが、調査区外に延びるものが多く全体を把握できたのはSI-3のみであった。遺構の多くは古代に属するが、溝（SD-1）については近・現代の水田に伴う用水路跡と思われる。

今回は確認した遺構が少なかったため、主に調査時に気づいた点について述べてみたい。掘立柱建物跡は全体を調査できたものが１棟もないため、梁行や桁行等不明な点が多い。SB-3では柱間以外は不明で、SB-1･2では共に東西方向が２間であるが南北方向が不明である。SB-1･2･3の柱間は、前田遺跡の前回調査で確認された２間×２間の掘立柱式建物跡の柱間寸法に類似しており、同様の規模と推定される。その他に調査区内で小穴を11口確認したが、南西－北東方向に分布する傾向があるものの配列に規則性等は認められなかった。また前田遺跡の前回調査では１間の掘立柱式建物跡も多くみられたが、今次調査では認められなかった。あるいは、SB-3がこの部類に含まれる可能性をのこす。

住居は完掘できたのがSI-3のみであるため、調査区外に延びる部分については判然としないが、構築面の掘り込みとカマドについて記す。

SI-1･3･4の住居跡では、いずれも構築時の住居コーナー付近に浅い掘り込みが認められた。SI-2の南壁コーナー付近では不明瞭な掘り込みがみられるのみで、明確には確認できなかった。SI-1は西壁の北・南コーナーに、SI-4は南壁の東・西コーナーにみられ、他の住居より小さいが明瞭に掘り込まれていた。SI-3が最も明確に確認できた。本跡は２回の拡張がみられ（第21図）、１期は北壁の東・西コーナーに、２期は北西コーナーを除く３ヶ所に、３期は各コーナーに認められた。いずれも平面形が不定形で、深さ10～20cmと浅く貼床下で確認しているため、柱穴ではなく荒掘り時の掘り込み跡と推定された。特にSI-2では南壁の東・西コーナー付近にP15･16がみられるが、いずれも50cm以上の深さがあり４本柱の主柱穴と思われることからも、四隅にみられる掘り込みが柱穴とは考え難かった。前回の調査でも同様な掘り込みをもつ住居がみられ、構築時に基準点となるような小穴を住居のコーナーに掘り込んだ痕跡と考えられており、集落の東端に位置する本調査区でも同様な方法による住居の構築が行なわれたものと思われる。

住居跡はいずれも貼床が行なわれており、SI-3･4では貼り床下から先行する主柱穴が確認されている。SI-3



第21図　ＳＩ－３変遷図・ＳＩ－４柱穴推定図

では２回の建て替えが行われており、３期目では竪穴の平面が東西に長い長方形となる。主柱穴は長軸にそった２本柱で、３期目の住居になってから設けられたと考えられる。しかし同位置で柱穴の重複が認められるため、３期目には主柱穴の立て替えがあったと推察される。またSI-4では床面で２本の主柱穴を確認したが、さらにその南側の貼床下で２本の柱穴が認められた。SI-4では南半部のみで全様は知り得ないが、４本柱を２本柱に建て替えたか、または住居跡の北側への拡張により４本柱の主柱穴を全て北側に建て替えたと思われる（第21図）。東側が未調査であるが、SI-1では主柱の立て替えが認められなかったため４本柱と推察される。

なお前回の調査（注１）例をみると、２本柱の住居跡は約160軒中14軒と少数であった。このうち５軒が壁柱穴で、他の９軒はSI-3と同様に竪穴内に柱穴を掘り込んでいた。平面形は東西にやや長い方形もしくは長方形が主であるが、方形のものも若干認められた。規模は9～26㎡と様々であるが、最小の９㎡を除くと約13～16.7㎡が５軒、21～26㎡が３軒となる。したがって約28㎡のSI-3は、前回の調査事例のなかでも大型の部類に入る。またこれらのうち建て替えが行われたものは２軒みられ、１軒は２本柱から４本柱に、他の１軒は壁柱穴から床面の２本柱へ変えられていた。これらの住居跡は８世紀中葉頃に集中しており、本跡もこれに近い時期と考えられる。本跡（SI-3）では当初、建て替えにより大型化した住居の構造材を支えるため竪穴内に柱穴を掘り込んだものと推察したが、前回の事例から住居の大型化がただちに竪穴内の２本柱に結びつくとは断定し難い。

カマドはSI-1･3で確認しており、SI-1では男瓦片が支脚と袖芯に使われていた。SI-1カマドは右袖が壊されているが、袖芯の長胴甕等が出土するなど残存状態は良好であった。カマドの右袖と天井部は壊されていたが、芯材として使用された長胴甕は原位置を留めるかのような状態で出土した。特に焚口天井部の芯材と思われる長胴甕は床面に意図的に置いたかのような印象を受けた。そのためカマドは構築材である粘土と土器とを分けながら解体したかのように思われ、壊すというより新たなカマドの構築材としての再利用を前提とするかのような印象を受けた。しかし構築材や土器類はそのまま放置されており、途中で作業を止めたようにも思われる。また火床近くの埋土中からは完形の小形甕と坏が出土したが、これらはカマドの芯材や埋没時の流れ込みとは考え難く、住居の移転に際してのカマドの破壊に伴う祭祀的なものかと推察する。

SI-3のカマドは黄褐色粘土で構築されており天井部は壊されていたが、両袖とも残存していた。袖芯として凝灰岩の切石が使われていた。右袖芯の切石は一部欠損するも、両者とも同じ寸法であり何らかの規格性があった可能性がある。凝灰岩層の露頭は、本跡から北北東方約１kmの長岡百穴や北方約300mを通る宇都宮環状線の切り通しでもみられるため、当時でも入手は比較的容易であったと思われる。また材質は非常の脆く、指頭で強く擦るだけでも表面が剥落するほどであり、加工も簡単であったと思われる。しかし入手や加工とも比較的簡単であると思われるのに、前回の調査でも出土例はあまり多くなかった。やはり入手や加工の手間がかからず、日常的に欠損品が発生し入手しやすい土器類が使用されたものと思われる。

以上気づいたことを述べてみたが、小規模の調査であったため住居跡や掘立柱式建物跡についても十分に把握できたとはいえなかった。今次調査区は東側に丘陵斜面が迫る遺跡（集落）の東縁辺部に位置するが、遺構は比較的集中していたと思われる。また調査区内では東側に向かうにつれ遺構が少なくなる傾向がみられたが、南北方向にはそのようには感じられなかった。前田遺跡は釜川東岸と宇都宮丘陵西斜面のあいだの緩斜面に立地しており、遺構の広がりは今次調査区付近を東限として釜川に沿って南北に延びるものと思われる。

注１　前田遺跡　－宇都宮市立上戸祭小学校建設に伴う発掘調査－　宇都宮市文化財調査報告書　第29集
　　宇都宮市教育委員会　平成３年３月

参考文献
栃木県史　資料編考古１　栃木県　昭和51年３月31日
宇都宮市史　原始・古代篇　宇都宮市　昭和54年３月24日

図版1

調査区全景（東から）

調査区全景（南西から）

図版２

調査区遠景（東から）

調査区西壁標準土層（東から）

調査区南壁標準土層（北から）

ＳＩ－１土層断面（西から）

ＳＩ－１（南から）

ＳＩ－１掘り方（南から）

ＳＩ－１カマド遺物出土状況（南西から）

ＳＩ－１カマド（南西から）

ＳＩ－２（南から）

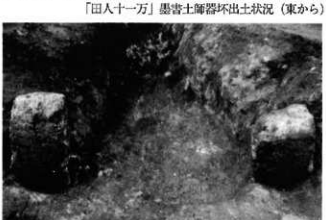
ＳＩ－２掘り方（南から）

ＳＩ－３（南から）

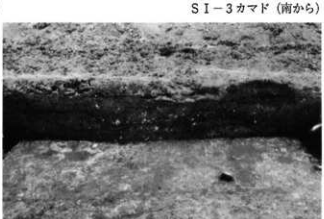
ＳＩ－３掘り方（南から）

「田人十一万」墨書土師器坏出土状況（東から）

ＳＩ－３カマド（南から）



ＳＩ－３凝灰岩製袖芯出土状況（南から）



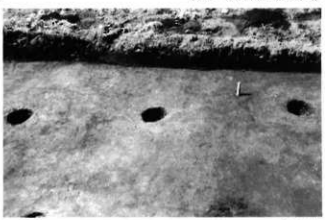
ＳＩ－４土層断面（南から）

図版4

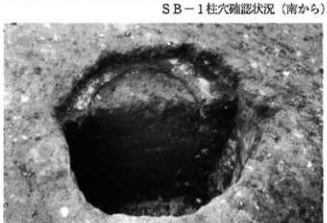
ＳＩ－４（南から）

ＳＩ－４掘り方（南から）

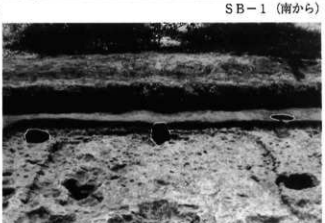
ＳＢ－１柱穴確認状況（南から）



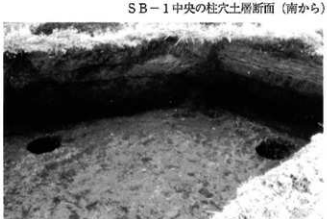
ＳＢ－１（南から）



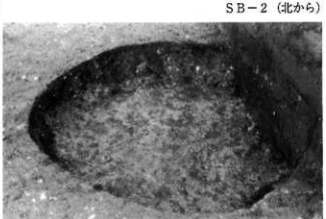
ＳＢ－１中央の柱穴土層断面（南から）



ＳＢ－２（北から）



ＳＢ－３（北東から）



ＳＫ－１（西から）

9－9

8－6

9－8

9－10

8－4

8－3

8－2

土器（土師器甕・小型甕・坏・須恵器坏）

図版 6

10−12

14−3

10−15

14−1

14−2

14−2

15−11

15−10

17−3

15−12

17−4

17−5

土器・瓦・石製品・鉄製品

報告書抄録

ふりがな	まえだいせきかみとまつりしょうがっこうひがしちく
書名	前田遺跡　上戸祭小学校東地区
副書名	
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第52集
編著者名	中山哲也　倉田有子　河野一也
編集機関	日本窯業史研究所
所在地	〒324-0611　栃木県那須郡馬頭町小砂3112　TEL0287−93−0711
発行機関	宇都宮市教育委員会
所在地	〒329-8540　栃木県宇都宮市旭１－１－５　TEL028−638−2764
発行年月日	西暦2005年(平成17年)３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
前田遺跡　上戸祭小学校東地区	宇都宮市 上戸祭町字 前田394番地３ 及び402番地２	09201	365	36° 35′ 25″	139° 52′ 10″	20020415 ～ 20020509	310m²	民間開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
前田遺跡上戸祭小学校東地区	集落跡	平安時代	住居跡　４軒 掘立柱式建物跡　３棟 土坑　１口	須恵器　坏、甕 土師器　坏、甕 鉄製品	「万」・「田人十一万」の墨書のある須恵器坏が住居跡から出土した。

宇都宮市埋蔵文化財調査報告第52集

前田遺跡　上戸祭小学校東地区

平成17年３月発行

発行　宇都宮市教育委員会文化課
（宇都宮市旭１－１－５）
TEL (028)632−2764

印刷　下野印刷株式会社
（宇都宮市宝木町１－28）
TEL (028)662−2511